見え方の操作と保育

－感情・表情・化粧－

企画責任・司会:　戸田　有一　（大阪教育大学）
企画・指定討論者:　諏訪　きぬ　（NPO 法人さやま保育サポートの会　保育サポート研究所）
話 題 提 供 者:　木戸　彩恵　（立命館大学衣笠研究機構生存学研究センター）
指 定 討 論 者:　菅原　健介　（聖心女子大学）
小川　晶　（植草学園大学）
小川　房子　（明星大学）

[企画主旨]

私たちは、社会の中で生きていく際に、自身の感情も、それと関連した表情も、また、さまざまな化粧などの行為も、自分の思うままではなく、程度の差こそあれ、周囲の受け止め方を推測したり、暗黙のルールにあわせたりしながら調整している。そして、感情やその表現を操作する必要がある労働が感情労働として研究の対象になっているように、その調整の程度や、自律性、そして公平性が問題になる。さらには、化粧についても、保育の場は、ばっちり化粧をして向かう場なのか、薄い化粧で臨む場なのかのルールは明示化されていないことが多く、困惑や、ときには軋轢を生むこともある。

本ラウンドテーブルでは、「保育」という場に求められる感情、表情、化粧について、話題提供をもとに、自由に論議をしていきたい。

[話題提供概要]

自己―他者の関係性の媒介としてのよそおい－保育場面での化粧の認識－：木戸彩恵

現代社会において私たちは，肉体や頭脳だけでなく心までも搾取されている。Hochshild が提起した“感情労働”の概念が重要とされるのは，サービス産業社会における「心の商品化」の問題に焦点をあてているためである。この意味で，感情労働という概念はそれ自体がネガティヴな印象を与えやすい。Black（2008）は多くの感情労働の本質的特徴について，「それは外からは見えず認められないこと，そして長年それに携わってきた人間には，見えないことの結果が十分に分かっていることだ（p188）」と述べている。感情労働は，特定の労働に関わるスキルであるという特徴をもつが，特に女性労働者の対人関係スキルは，女性に本来的に備わっているものであり，努力や訓練で得たものではない（したがって，報酬の対象とはならない）とみなされる。感情への対応スキルは仕事の試行錯誤を通じて習得するべきと考えられており，きちんとしたトレーニングも行われなければ，サポート体制も整っていないのが通例である。つまり，感情労働の領域は，スキルとされつつも，明確に認知されていない，あるいは単に当たり前と思われがちなのである。

本ラウンドテーブルでは，よそおいを個人が生身の状態で外界と接することを避けるための手段（Valsiner, 2001）として――感情労働の媒介として――使用できる可能性について提案したい。より具体的には，感情の動きに意識的に目を向け，感情を操作するための媒介としてよそおいがいかに貢献できるか，心理・身体的状態を円滑に媒介し，スイッチングする手段としてのよそおいについて考えていきたい。Hochshild（1983）の「感情管理の他律化が自己に大きな影響を与える」という言葉をポジティヴな方向に転換して考えると，行動は全て援助つきで成立するという他立的自律の概念にたどり着き（望月，2010），よそおいによる心理支援の道筋を開くことができる。それは，神谷（2011）が，「感情労働が求められる場面において，保育者自身の感情の動きに保育者自らが内省し，目を向けているかどうかが肝要なのではないのかと考えられる」と述べていることを踏まえると，よそおいは保育者自身の情動調整や感情管理が求められる場面で身体を介しながら自らの状態に目を向けるためのきっかけをもたらすと考えられるためである。

ただし，よそおいは，人を支えたり発達させる力も持つが，支配する力ももつ。お仕着せの化粧，お仕着せのよそおいは，個人の支援どころか，感情労働を強いるものとして，個人の支配という結果をもたらす危険性をもつかもしれない。そのため，よそおう主体の実態や内実の把握，保育の現場の多様性の理解が不可欠である。本話題提供が保育の実践者とよそおい研究の対話のきっかけとなることを望む。